
春の風にのって

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

春の風によって

【コード】

N7106B

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

春のある日、ボクは風によって旅に出た。遠く遠く、ずっと遠くへ飛んでいきたい……。

(前書き)

これは、企画小説「春小説」です。「春小説」で検索すると、他の先生方の作品を読むことができます！

春の風によって

本当はみんなと別れなくなかったんだ。お母さんに守られて、ずっとみんなと一緒にいたかった。でも、いつかは行かなきゃならぬんだね。

「さようなら」

ヒューッと、一陣の風が吹いてきて、ボクとみんなは大空に舞い上がった。春風に乗って飛んでいく。気持ち良い。空からのながめは最高だよ。途中まで一緒に飛んでいたボクの仲間達も、やがて散り散りに別れていった。

ボクはどこへ行くんだろう？ 出来るだけ遠くがいいな。遠い場所の土の中に落ちて、綺麗な花を咲かせるんだ。そう思いながら気持ち良く飛んでいたら、突然風が止んだ。あつ、まだ嫌だ。もっと遠くへ行きたい。だけど、風が吹いてくれなきゃ、ボクは飛んでいけない。ボクは、ふわっと草むらに落ちていった。

キャンキャン！ 近くで子犬の鳴き声がして、ドシンドシンと地面を蹴る音が聞こえた。ボクの直ぐ近くで、子犬がはね回り嬉しそうに吠えている。

ボクを押しつぶさないでよ！ そう思った瞬間、子犬が地面に寝ころび、ボクの上ののっかかった。わぁー苦しい！ 潰されるかと思っただけど、子犬は直ぐに立ち上がり、また駆けていく。ボクも一緒に子犬と跳ねる。ボクは子犬の背中にくっついたみたいだ。

やがて、飼い主が子犬を呼ぶ声が出て、子犬は全速力で駆けていく。ボクは振り落とされないよう必死でしがみついた。子犬は飼い主と一緒に、自動車の中に乗った。大きなエンジンの音が出て、自動車が発車する。空を飛んでみたいに速いスピードだ。はしゃぎ疲れた子犬は、シートの上で眠りだした。ボクも子犬の毛の中で一休み。

気付いた時、ボクはまた子犬の背に揺られていた。さつきみたい
に、子犬ははしゃいでいるけど、今度は別の場所みたいだ。石ころ
がゴロゴロしていて、近くでせせらぎの音が聞こえる。子犬は不安
定な石の上を跳ねるから、バランスを崩して転んだ。

あつ！ ボクは子犬の背から落っこちて、小石の上に降り立った。
子犬は飼い主に名前を呼ばれ、急いで走っていった。ここには土が
ない。ここにいたってボクは花を咲かせられないよ。

風吹いてくれないかなあ……。ボクが石の上で風を待っていると、
どこかから声が聞こえてきた。

「君はタンポポの種だね。そんなとこにいたって花は咲かないよ」
声のする方をたどっていくと、土手の石垣の隙間に一輪の小さな
タンポポが咲いていた。石垣と石垣の隙間から黄色い花を覗かせて
いる。とても窮屈そうだ。

「ボクはまた飛んでいくんだよ。君はなんでそんな所に咲いちゃっ
たの？」

「ちょうど、石垣の隙間に種が入り込んだのさ。確かにここは狭い
けどね、ここなら人に踏まれることはないよ」

「そうかもね。でも、ボクはもつと遠くへ行きたいんだ」

ボクはじつと風を待つ。やがて、川辺に風が吹いてきて、ボクの
体を持ち上げてくれた。ボクはまた、ふわふわと空に舞う。けれ
ど、今度の風は弱くて、すぐに止んでしまった。

あつという間にボクは下降し、川の中へ落ちていく。ああ！ ボ
クは泳げないんだよ。川の上では花は咲かせられない。ボクは川に
落ちた。ふわふわの毛のお陰で沈まなかったけれど、ボクは川の流
れにどんどん流されていく。どこまで行くんだろう？ ボクが不安
になってきた時、水面をピチャツと叩く音がした。ボクの目の前に
大きな口が現れる。鯉だ。口をパクパクさせ、ボクについて泳いで
くる。

「なんだ、餌かと思ったら、タンポポの種か」

鯉はボクが食べられないから、残念そうだ。

「ねえ、この川をずつと行ったら、どこに行くの？」

「何だつて？ 川の先は海に決まってるさ。ボクは海じゃ生きられないから、海には行かないけどね」

鯉はまたピチャツと水面を跳ねた。

「タンポポの君は、水の中じゃ生きられないだろ？ もちろん、海の中でもね」

「そうだよ。ボクは土がなきゃ生きられない」

「そりゃかわいそうに」

鯉はそう言つて、水中にもぐるうとする。このまま流されるのは嫌だ。

「ねえ、待つて。鯉さん、君のその大きなしっぽで、ボクを飛ばしてくれない？ そしたら、ボクは水の外に出られると思う」

「やれやれ、世話のかかる坊やだね」

鯉は顔を出し、口をパクパクさせて言う。

「お願いだよ。ボクは、綺麗な花を咲かせたいんだ」

「しょうがないね」

鯉は水面を大きく跳ねると、しっぽでボクの体を思い切り叩いた。鯉のしっぽは痛かったけど、ボクは飛ばされて、川から脱出する事が出来た。大きく弾んで、ちょうど吹いてきた風に乗る。風は強く吹いてきて、空へ空へと舞い上がる。

鯉のいた川が、下の方に小さく見える。ボクは鳥になったみたいで、ぐんぐんスピードをあげて、大空を飛んでいた。道路、家、ずつと向こうには、大きな海も見えた。春の日差しに照らされて、青い海はキラキラと光っている。

海は綺麗だけど、ボクは海には行きたくないよ。ボクは土の上に着陸したいんだ。

どこまで飛んだんだろう？ 強く吹いていた風がようやくおさまってきた。それと同時に、ボクの体も下降していく。ふわりふわり、

ゆつくりと地上に向かって舞い降りる。ボクはどこに行くのかな？
人の住んでる家が見える。小さな赤い屋根の家。広い庭があればいいんだけどな。その家には庭がないみたい。コンクリートの上じやボクは咲けないよ。あの、石垣のタンポポみたいに、ボクも隙間で咲くのかな……。

ふわりふわり、ボクが考えている間に、ボクの体は地上に到着した。そこは柔らかな土の上。あまり広くはないみたいだけれど、なんだかとても温かくて気持ちがいい。ここはどこだろう？ ボクの体は土の中に沈み込んだ。ここがどこか分からないけれど、どうやらここがボクの住む場所みたいだ。

土の中に体を沈めたボクは、次第に眠くなってきた。心地良い土の布団にくるまれて、ボクは体を休める。今度目覚めた時には、ボクは綺麗なタンポポの花になっているだろうか？ ボクの意識は次第に薄れていった。

「ママ、ママ」

小さな女の子が、プランターの中を覗いている。

「どうしたの？」

女の子のママが、女の子の隣りにしゃがむ。

「見て、まだ種を蒔いてないのに、プランターに芽が出たの」

プランターの中には、一つだけ小さな緑の芽が出ていた。

「本当ね。どこかから、種が飛んできたのかもしれないわ」

「何のお花かな？」

女の子は、小さな芽をじっと見つめて微笑んだ。

「わたしが大切に育ててあげるね」

了

春の風にのって

(後書き)

久しぶりに企画小説に参加させていただきました！ ちよつと前に投稿した「日だまり」と同じく、春の光景を描いてみました。タンポポの旅の様子が伝わればと思います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7106b/>

春の風にのって

2009年7月3日18時58分発行